



平川博之
全老健 副会長

羅針盤

喉元過ぎれば熱さを忘れる



広辞苑によれば「喉元過ぎれば熱さを忘れるとは苦しかったことも、過ぎ去れば全く忘れてしまうことのとえ。苦しい時には人を頼み、苦しさが去ればその恩を忘れることにいう」とされている。

正月気分も抜けぬ2020年1月6日、NHKニュースが中国武漢で原因不明の肺炎が発生と報道した。後に全世界を戦々慄々、危急存亡の事態に陥れる新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の登場である。虚実入り混じる報道に翻弄されるなか、2月24日に厚生労働省は都道府県介護保険担当者に高齢者施設の面会並びに搬入業者等を制限する通達を発出した。これが我々と新型コロナとの闘いの幕開けであった。

全老健は4月早々に新型コロナに関する緊急記者会見を開き、筆者は老健仲間へのエールを込めて「世界に冠たる日本の介護力」を賞した上で「介護を止めるな!」といま考えると理不尽なお願いをした。以来4年半、老健施設の同志たちは昼夜を問わず、文字どおり身命を賭する覚悟で高齢者を護っている。

その結果、2024年1月時点で新型コロナの人口10万人当たり累計死者数は米国、英国の約344人に対し、日本は約60人と大差をつけている。この要因の1つとして高齢者施設関係者の不撓不屈の努力をあげることにより異を唱える者はいないであろう。正に艱難辛苦の日々ではあったが、この有事を背景に全国各地で医療・介護・福祉に関する新しい取り組みが生まれたことも事実である。以下に筆者が関与したものの一部をあげる。**東京都老人保健施設協会(都老健)での取り組み**

「新型コロナウイルス感染症発生時における職員派遣協定」には80施設、213人が登録。「応援物資提供事業」には98施設が登録。「ポストコロナ患者受入れ事業」には115施設が登録、32施設に受入れ実績。「公式ホームページ強化事業」では「施設検索システム」を拡充し、従来の入所、ショートステイ、通所リハビリの空き情報

に加えて「ポストコロナ患者受入れ情報」を公開し、感染症にも強い老健施設の多機能性をアピールした。FAXによる「老健とうきょうNEWS」は4年間で50回発信(2022年度は23回発信)し、感染状況・支援要請方法等の情報提供を行った。オンラインによる「老健とうきょう・ほっとライン」では感染状況を頻回に調査し、リアルタイムの情報共有とともに関係機関へ迅速な支援要望を行った。直接意見交換できる場としてWebを活用した「ブロック別情報交換会」等の連携連絡会議を4年間に60回開催し、延べ参加人数は800人を数えた。これら事業や取り組みにより明らかに会員間の絆を深めることができた。

東京都八王子市での取り組み

新型コロナ感染を「災害」と位置づけ、災害医療コーディネーターを司令塔に「地域医療体制支援拠点」を立ち上げ、行政、保健所、医師会、医療機関、高齢者施設等によるワンチームを結成し、入退院・転院可能な患者情報等を一元管理。重症化リスクのある自宅療養者や入所者の早期の診療・入院に対応した。この「オール八王子方式」が威力を発揮したのは第5波が襲来した2021年8月17日、市内の1日の陽性者がピークの257人に達した直後の8月19日から25日までの1週間、生命線のコロナ病棟利用率を93~90%で完璧にコントロールし、医療・介護崩壊を回避できたときである。この間、市内の病院、施設、在宅は一体化し、八王子市自体が1つの病院・施設となった。正真正銘の「地域包括ケアシステム」ができあがったのである。

このようなコロナ禍が生んだ新たな取り組みや施策は全国で実践、展開されていたはずである。そこで冒頭の「喉元過ぎれば」に戻る。いまこそ「熱さを忘れる」ことなく、この度の経験、実績が今後の医療介護施策に活かされねばならない。また、国や行政にはこの間の私たちの辛勞辛苦を忘れられては困る。